

トピックス…③

福岡で教育関係者向け 酪農教育セミナー開催

学校の授業や体験学習で酪農を活用してもらうため、本会は8月22日に福岡市のTKP博多シティセンターで、教育関係者を対象に酪農を題材にした「教育セミナーイン福岡」を開いた

● 酪農体験で「食」、「命」、「仕事」を学ぶ

教育セミナーは、牧場が持つ「食」、「いのち」、「勤労」などの教育力を活用し、酪農家と教員が連携して取り組む酪農教育ファーム活動の考え方や事例を教育関係者に紹介することで、学校での授業に役立ててもらうことを目的にしている。本会は今年2月に東京で初めてセミナーを開催したが、好評だったことから、今年度は8月に福岡、12月に札幌で開催することとなった。

福岡の会場では、新たな学習指導要領の策定に携わった角屋重樹広島大学大学院教授が、「牧場が持つ教育力を授業で生かす」と題して基調講演した。角屋教授は新学習指導要領が目指すものとして、「基礎的・基本的な知識と技能の習得」、「思考力、判断力、表現力などの育成」、「学習意欲の向上」の3点を挙げたほか、新学習指導要領から考えた酪農体験については、「食の教育」、「命の教育」、「キャリア(仕事)の教育」の3点から考える必要性を指摘した。

まず、「食の教育」については、牛の成長を観察し、成長した命をいただく(食べる)という牛とのかかわりを学ぶことで、食べ物を無駄にせず、適切な食事の量感覚が子供たちに育つことが考えられるとしている。また、「命の教育」については、子供たちが牛の体温を感じることや、牛とのかかわり方を誤ると牛が嫌がるといったことを体験することで、相手の立場を考え、命あるものとして大切に、相手との関わりに責任を持つようになるとしている。さらに「キャリアの教育」については、子供が酪農家の行動を観察、まねることで酪農家の工夫を発見し、酪農家の仕事に対する理解と酪農産業の活性化につながるとしている。

● 酪農教育に大きな可能性・廣田氏 継続的な酪農教育が必要・大藪氏

酪農教育ファーム活動を教育現場に取り入れた事例として、熊本県合志市立合志南小学校の廣田順子教諭、

熊本県合志市の酪農家・オオヤブデイリーファームの大藪真裕美さんがそれぞれ発表した。

廣田教諭は、前任の泗水小学校が平成13年度から1、2年生の生活科の授業で「もうもうたいけん」の名前で酪農体験を実践してきたが、同校が保護者や地域と一体となった学校作りをする「コミュニティスクール」の指定を受けたことで、「もうもうたいけん」の内容を充実させたことなどを説明した。廣田教諭は「もうもうたいけん」の成果について、「子供たちが『生きる』ことや『いのち』を直接感じ、正確に観察する目や科学的思考を育てることができるなど多くの成果があった。酪農を教育現場に取り入れることでいろいろな可能性を秘めていることが実感できた」と述べた。

大藪さんは、自らの酪農教育活動にふれ、「生乳を出荷するだけでなく、学校の子供たちに酪農や農業を知ってもらうため、文化祭の時に搾乳体験や乳製品などの直売を行ったが、子供や親たちに大きな影響を与え、継続的に行うべきだと思った」と述べた。

セミナーの参加者は10班に分かれ、コーディネーターの文部科学省の田村学教科調査官の司会で、セミナーの内容を「食育」、「キャリア教育」、「生命教育」の3つの単元にまとめて発表した。今回は小中学校の先生をはじめ、酪農家や酪農団体関係者、将来教師を目指している高校生など60人が参加し、単元発表ではいろいろな視点から様々なアイデアが出された。

